

創建期東大寺大仏の比例的復原

美術工芸研究室

東大寺大仏（盧舎那仏坐像）の創建期における規模とプロポーションがいかなるものであったか。この報告は「大仏殿碑文」および「延暦僧録文」に記される法量と、近來研究所において実施している仏像の写真測量成果とにもとづいて、創建期大仏の比例的な復原を試みたものである。

文献に記される法量の検討 碑文および僧録文によって明らかな法量は第1表に掲げた計30箇所である。このうち坐高・腹長・掌長は両文献で数値が異なるが、僧録文の掌長1丈6尺は常識的にも何かの誤りとみられ、また坐高は古来の伝承に従えば碑文の5丈3尺5寸が一般的であるので、この3箇所についてはいずれも碑文の法量を採用した。

次に、両文献の法量がすべて像の2点間距離を示していることはいうまでもないが、それらが各々直線距離か、あるいは像面に沿った実距離であるのか、この限りでは断定する根拠はなく、またここでは大仏の基本的なプロポーションを推定復原することが目的なので、作図上の便宜も考えて一応すべてを正射投影による直線距離とみなして用いた。

また、上記法量における計測点について検討を加え、特に解釈をした主なものを挙げれば以下ようになる。なお、多くはごく常識的に解釈した。①目間＝その長さ1尺6寸を作図上の構成から考えて两眼の内眥間とした〔7〕。②自鼻前至眉間＝鼻稜の最下端、すなわち鼻先と、両眉が迫って鼻稜に連なる鼻稜のつけ根まで〔9〕。③耳長＝いわゆる耳の長さ。

第1図 大仏復原図（正面全図）

創建期東大寺大仏の比例的復原

ただし位置は写真測量成果によって、耳輪最頂点がほぼ髮際線に水平な位置[13]。④肩径＝いわゆる肩幅。しかし、計測点は把え難いので、写真測量成果をもとに、仏像の三道最下端に接する水平線上に求めた[15]。⑤胸長＝胸幅に当てた[17]。⑥臂長・肘至腕長＝臂長は右上膊の長さ、作図上では右肩（三道下の水平線）より前膊の上端まで[18]。肘至腕長はさらにその先、つまり前膊部上面[19]。⑦腹長＝腹のくびれの左右端の長さ[20]。⑧脛長＝脛脛（ふくらはぎ）の長さ。結跏して上に重なる左足に求めた[23]。⑨足下＝仏の32相中の足下安平相の用例にもみるように、いわゆる足裏の長さ[25]。⑩面長＝普通髮際以下顎までをさすが、この場合、面幅・肉髻高・自髮際至頂などとの均衡を考えると、肉髻下から顎までが該当する[27]。

写真測量成果の応用 上述の文献の法量における計測点は、必要に応じて写真測量成果にもとづいてその位置と相互関係を検討したが、ここで特に問題になるのは「膝前径」についてである。作図上、

対照番号	大仏殿碑文 (尺)	延暦簡録文 (尺)
1	坐高 53.50	結跏趺坐高 52.40
2	肉髻高 3.00	肉髻高 3.00
3		自髮際至頂 7.00
4		自眉上至髮際 1.94
5		眉間 1.10
6	目長 3.90	目長 3.90
7		目間 1.60
8		自目至眉 0.80
9		自鼻前至眉間 4.50
10	人中長 0.85	人中長 0.85
11	面広 9.50	面径 9.50
12	面頤長 1.60	面頤長 1.60
13	耳長 8.50	耳長 8.50
14	頸長 2.65	頸長 2.65
15	肩長 28.70	肩径 28.71
16	眉長 5.45	眉長 5.45
17	胸長 18.00	胸長 18.00
18	臂長 19.00	臂長 19.00
19	肘至腕長 15.00	肘至腕長 15.00
20	腹長 13.00	腹長 15.00
21	掌長 5.60	掌長 16.00
22	中指長 5.00	中指長 5.00
23	中脛長 23.85	中脛長 23.85
24	膝前径 39.00	膝前径 39.00
25	足下 12.00	足心長 12.00
26	膝厚 7.00	膝厚 7.00
27	面長 16.00	
28	自鼻前径 2.94	
29	同高 1.60	
30	口長 3.70	

第1表 東大寺大仏法量（創建期）

第2図 大仏復原図（側面全図）

第3図 大仏復原図（頭部正面部分）

第4図 大仏復原図（頭部側面部分）

これを現在われわれが使用しているいわゆる膝張（膝幅）と解釈して用いると、膝張が像高に対してやや短いのが注意される。これが巨大な大仏における特色とみれば問題はないが、他方、第5・6・7図のように写真測量成果における仏像の像高と膝張との関係をもって比較すると、大仏に限って膝張が短かく、立面図においてやや安定感に欠けるきらいがあるのは不自然である。すなわち奈良時代の代表作例である薬師寺金堂本尊および唐招提寺金堂本尊においてはもとより、藤原和様彫刻の典型とされる平等院鳳凰堂本尊においても、いずれも膝張をもって直径とする円を、像の正中線上に中心を求めて描けば、その円周がほぼ白毫位置に接することが明らかとなるが、これを試みに大仏の立面図で用いると、円周は像の鼻先ないし口の辺に当って他とかなり相異なる。さらに注意すべきことは、第5・6・7図^{註1}で、

第5図 薬師寺金堂薬師如来坐像実測図

第6図 唐招提寺金堂盧舎那仏坐像実測図

上述の門の中心を通り（中心は

は、肩先にて三道下の水平線と交わることになり、ここに膝張を直径とする門によって、仏像の「膝張」と「肩幅」とさらに「白毫位置」との相別関係がほぼ一定であることが確かめられる。したがって、この相別関係を大仏においても適用しようとするれば、その膝張は少くとも第1図にみるような長さを要し、その結果、逆に文献でいう膝前径とは普通にいう膝張を示すものではなく、膝前地付きの両端の長さか、あるいは両膝頭間を指しているものかとも考えられる。したがって、もしこの推測と解釈が当たっているとすれば、創建期の大仏のプロポーションは、意外なことに薬師寺本尊や唐招提寺本尊のそれとほとんど共通したものとなるのは注意されなければならない。

結論 以上のように文献に記された創建期大仏の法量と、仏像の写真測量成果をもとにして、大仏の比例的な復原を試みることができたが、これによって結論づけられることは、1)、大仏のプロポーションは、膝張を保留すれば、ほとんど他の仏像のそれに共通していること、2)、文献にいう膝張をそのまま用いれば、大仏のプロポーションは、他像に対してやや短いことが指摘できること、3)、もし膝張について前述のような解釈が可能ならば、さらに大仏のプロポーションは他の像のそれと全く一致すること、4)、写真測量の成果として、奈良¹¹

の位置の相別関係が支配していることが認められよう。一般に大仏は巨像なるがゆえに、頭部が他に比較して大きいかのように推測されているが、少なくとも創建期の大仏においては、それが俗説といわなければならない結論となったことは十分に注意されてよからう。

(なお、ここでは像の比例的な復原にのみしぼったので、像容・印相等に関する復原的な考証は省略した。したがって復原図においては仮に現像に倣って通肩相、与願・施無畏印として表現した。)

- 註 1 大仏蓮弁毛彫の千葉積迦像は多分に絵画的な表現がみられるが、それでも膝張はほぼ白毫下から両膝下端接線までの長さに相当している。
- 2 現在の大仏の膝張は 40.57尺で、文献でいう 39.00 より若干大きい、もとよりこれが当初のままであるとは断定できない。

第7図 平等院鳳凰堂阿弥陀如来坐像実測図

(長谷川 誠)